

Title	生涯学習の場としてのサイエンスカフェ
Author(s)	小林, 俊哉; 浅野, 浩央
Citation	知識創造場論集, 4(5): 9-19
Issue Date	2008-03
Type	Research Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/5133
Rights	
Description	北陸先端科学技術大学院大学 21世紀COE プログラム 「知識科学に基づく科学技術の創造と実践」

生涯学習の場としてのサイエンスカフェ

小林俊哉

北陸先端科学技術大学院大学・科学技術開発戦略センター准教授

浅野浩央

北陸先端科学技術大学院大学・科学技術開発戦略センター 元拠点形成研究員

Abstract

サイエンスカフェはカフェシアンティフィークとも呼ばれ、1998年からイギリスで始まったと言われる。ドリンクを片手に科学について双方向に語り合うイベントである。STS Network Japan2004（科学技術社会論ネットワークジャパン）春のシンポジウム「カフェシアンティフィークーその現状と可能性ー」全体討論「サイエンスカフェをどう理解するか」でサイエンスカフェの今後の方向性について、多様性の確保、地域性を守ること、その個性が守られることが大切であるという指摘がなされた。北陸先端科学技術大学院大学は、21世紀COEプログラム「知識科学に基づく科学技術の創造と実践」における学際コミュニケーション活動の一環として始まったサイエンスカフェの活動が地域連携において有用であり、先端科学技術の知識を地域の市民に伝えていく上で有用であることから生涯学習の場としても有用であることを発見した。

本稿ではサイエンスカフェが開始されるまでの経緯と地域活動の現状と今後の展望を報告する。

Keywords: サイエンスカフェ、科学コミュニケーション、科学技術理解増進、文理融合、学際研究、地域連携、生涯学習

はじめに

「サイエンスカフェ」とは喫茶店等の寛いだ雰囲気の中で科学の専門家と市民が同じ目線で対話を行う場のことである。1998年にイギリスのリーズで始まったカフェシアンティフィーク¹が起源とされている²。その後、欧米諸国を経て日本では2005年に東京の下北沢で東京大学の研究者らを中心に始めて開催された。文部科学省、日本学術会議等の政府関係機関も新しいタイプの科学技術理解増進・科学コミュニケーション活動として科学技術振興機構（JST）等を通じて積極的に支援を進めている。

北陸先端科学技術大学院大学の21世紀COEプログラムにおける「サイエンスカフェ石川」は、活動を通して専門家の知見や大学の研究により得られた成果を発

¹ <http://www.cafescientifique.org/>

² 1997年にフランスで開催されたという記録もある。

表し、北陸地域の声を本学の研究にフィードバックすることで、両者の相互交流・相互理解を目指している。北陸地域におけるサイエンスカフェの開催は、地域住民と大学を橋渡しし、新しい生涯学習の場としても機能し始めている。その経過を本稿において紹介する。

1. 日本におけるサイエンスカフェの背景

2006年3月28日に閣議決定された「第3期科学技術基本計画」の「第4章 社会・国民に支持される科学技術」の「2. 科学技術に関する説明責任と情報発信の強化」において、科学技術への国民の支持を獲得するために研究機関・研究者等は研究活動を社会・国民に出来る限り開示し、研究内容や成果を社会に対して分かりやすく説明することをその基本的責務と位置付けた。その際、多様な媒体を効果的・効率的に活用する。研究者等と国民が互いに対話しながら、国民のニーズを研究者等が共有するための双方向コミュニケーション活動であるアウトリーチ活動を推進すべきこと。そのために競争的資金制度において、アウトリーチ活動への一定規模での支出を可能にする仕組みの導入を進める等の施策を決定した³。

以上の規定に基づき文部科学省は科学技術振興機構（JST）等を通じて種々の科学コミュニケーション活動の促進・支援を開始した。その中でも 2005 年から

³第3期科学技術基本計画の詳細については文部科学省ホームページを参照されたい。

<http://www.mext.go.jp>

我が国において始まったサイエンスカフェは文科省サイドの期待が高く、平成18年度春季の「科学技術週間」において日本科学未来館の毛利衛館長をリーダーに全国47都道府県でサイエンスカフェの開催を推進した。また同年秋には東京お台場の日本科学未来館において『サイエンスアゴラ 2006』を日本学術会議と共催で開催し、日本全国のサイエンスカフェ運営者の交流を進めている。

本学では、21世紀COEプログラム「知識科学に基づく科学技術の創造と実践」の支援の下にサイエンスカフェが日本で最初の産声を上げた2005年の秋に北陸地域で初のサイエンスカフェ開催を実現した。この取り組みは本COEプログラムにおける学際コミュニケーション活動の社会実践として位置付けられた。

2. 本学における「サイエンスカフェ石川」誕生の経緯

先ず本学におけるサイエンスカフェへの取り組みに至る経緯を紹介する。それは21世紀COEプログラムにおける学際コミュニケーション活動の結果として具現化したのである。以下はその経緯である。

2.1. 「学際コミュニケーション研究会」における取り組み

現代社会は地球温暖化や資源エネルギー問題など単独の学問領域では解決できない多くの大規模複雑な問題に直面している。さらに科学技術の高度な発達は学問領域の細分化を生じせしめ、こうした

諸課題の解決を困難にしている。これらの課題を解決するためには目的に応じて複数学問領域の研究者や利害関係者、非専門家を含む多くのアクターとの相互交流が欠かせない。そのため、昨今、学際研究の必要性が各界より問われている。日本学術会議は『新しい学術の体系（2003）』の中で従来の縦割り型学問を横につなぐ「俯瞰型研究プロジェクト」を提唱している。さらに文部科学省は第3期基本計画に向けて取るべき施策の1つとして、安全・安心に関わる諸課題を解決するため関連する学問分野の知を結集し迅速かつ有機的に連携した問題解決型研究（Problem oriented research）の継続した推進を提案している⁴。こうした社会的背景を踏まえ学術界では複数学問領域の研究者からなる問題解決型研究を積極的に組織し、推進していく動きもある⁵。

しかし、学問分野をまたがる研究プロジェクトの現場に視点を向けてみると、アクター間の対話不全が相互交流に支障を来している場合が少なくない。そのため学問分野をまたぐ、学際的研究を円滑に推進するためには、異なる分野の研究者、利害関係者を含む多くのアクターと

⁴二村英介「安全・安心な社会の構築に資する科学技術政策の現状について」第2回社会技術研究シンポジウム講演会資料 5-6 頁 文部科学省 科学技術・学術政策局 2005年

⁵科学技術振興機構（旧科学技術振興事業団）の社会技術研究システム事業、日本学術振興会の人文・社会科学振興のためのプロジェクト研究事業、日本学術会議の横幹連合の設置（2003年）、文理シナジー学会の設立（1997年）は分野をまたいだ問題解決型研究や社会提言を強く意識した研究組織である。

円滑なコミュニケーションが必要である。また、分野をまたぐ研究をコーディネートできる人材育成や研究活動をサポートする手法、方法論の開発も急務である。そこで、北陸先端科学技術大学院大学（以下 JAIST）では異なる専門領域の研究者が協働する際に生じる対話不全の検証と、解決のための方法論の模索を目的に2005年1月に本学客員助教授で財団法人未来工学研究所の主任研究員である緒方三郎氏（当時）が旗頭となって北陸先端科学技術大学院大学・科学技術開発戦略センターに1年間の時限付研究会「学際コミュニケーション研究会」を設置した。本節では平成16年度の活動と17年度の活動について紹介する。

2.2.平成16年度学際コミュニケーション活動の概要

平成16年度は知識科学研究科博士課程前期の岩瀬信雄氏（研究開発マネジメント）と材料科学研究科博士課程後期の鈴木正太郎氏（プラスチックの触媒反応技術）の共同研究である「KCボード（ナレッジコラボレーションボード）を用いた成熟分野の研究テーマ探索法の開発」⁶における問題点、COE分野横断研究プロジェクトの一環で行われた「文理融合ケース講義－触媒反応開発における科学技術戦略－」へ参加した任意の学生による異分野交流の問題点を話し合うため COE 分野横断研究プロジェクトに協

⁶詳細については岩瀬信雄 立瀬剛志「大学における創造的研究支援のための方法論に関する研究」『知識創造論場』第1巻2号 2004年を参照されたい。

力する学生を中心に隔週水曜日にミーティングを行った。その結果、ジャーゴンの壁と双方向コミュニケーションを図る場の設計が課題であることが判明した。

知識・材料の学生による分野横断研究「KC ボードを用いた成熟研究分野の研究テーマ探索手法の開発」の遂行にあたっていくつかの問題点が生じたのである。最も問題となったのは専門用語(jargon: ジャーゴン)を理解するための苦労である。ジャーゴンとは、特定の専門分野のコミュニティ内で用いられ複雑な内容を指示する専門用語である。とくに材料科学研究科(当時)鈴木氏の研究に関わるジャーゴンの理解には時間を要し、議論が中断することが多々あった。鈴木氏はジャーゴンについて「相手が理解できるよう説明をするには、かなりの時間が必要だった」と指摘している。一方、岩瀬氏も同様に指摘しているほか、「短時間で理解できるように説明するにはかなりの技術が必要ではないか」と指摘した。短時間でジャーゴンを理解してもらうためには説明の仕方、話し方に工夫が必要であり、今後の解決しなければならない課題であることがわかった。

次に「文理融合ケース講義」には経営学、情報科学、材料科学、機械工学、社会学など様々なバックグラウンドを持つ知識科学研究科と材料科学研究科(当時)の学生が参加した。参加者からはこんな指摘があった。「講義の時間の制約もあるし、分からない概念や用語に関して、積極的に聞けないような場の空気があった」、「ここまでの用語や概念はみんな知っているだろう、というようなある種の

共通理解への暗黙の了解があった」などだ。各ディシプリンには知っておくべき基礎的な概念や用語がある。しかし分野が異なる学生、研究者で協働した今回の事例ではそうした用語や概念が理解されていないことが多々あるようだった。そのため、分野をまたいで積極的な交流や活発な議論を図る「場」の設計について課題が残った。

ジャーゴンを分かりやすく説明する能力について検証するため、2005年10月から学際コミュニケーション研究会世話人の奥津祥子氏(知識科学研究科博士課程後期)と葉山稔氏(知識科学研究科博士課程前期)が中心となり、専門分野が極めて異なる学生や研究者が研究発表を行う「学際コミュニケーションゼミ」を設置した。また円滑な双方向コミュニケーションの「場」を設計するため、学際コミュニケーション研究会世話人の本稿著者である浅野浩央(当時、知識科学研究科博士課程前期)が2005年7月に「学際コミュニケーションカフェ」を設置し実践を行った。

2.3.学際コミュニケーションカフェの設置

異分野の円滑な双方向コミュニケーションを実現する場の設計や、異分野の学生、研究者が交流を図り副テーマ探索ができるような場を準備して欲しいという要望から、分野横断研究プロジェクトに参加する学生、研究者によるプロジェクトミーティングの他に2005年7月に浅野らが中心となって「学際コミュニケーションカフェ」を設置した。学際コミュ

ニケーションカフェは JAIST サイエンスカフェ の試行として位置付けられた。

主たるミッションは確定せず、学内研究者と学生の相互交流を目的に毎週水曜日に開催し、参加者からトピックスや議論テーマを募ってお茶を飲みながら話し合いを行った。将来的には地元地域のニーズ、シーズと学内外の研究テーマを結びつけ地域貢献を目指した「サイエンスカフェ」に発展させたいという声がメンバーから沸きあがってきた。そこでカフェに参加する学生にインセンティブを与えるため、他の学生や研究者と研究ニーズやシーズのマッチングが可能で、副テーマ研究のテーマ探索ができるようなコミュニティ作りを目指すほか、カフェで生じたコンフリクトや対話不全について検証し会議手法や運営方法を改善することで円滑な双方向コミュニケーションを図る場の設計に向けた活動を実施したのである。



図1 学際コミュニケーションカフェ
2005年7月

2.4.対話不全、コンフリクトの定量的分析と評価の必要性

以上の取り組みについて浅野らは2005年8月26日から28日にかけて滋

賀県で行われた STSNJ (科学技術社会論ネットワークジャパン) 夏の学校での活動報告を通して、次の点について指摘を受けた。何をもってプロジェクトのアクター間に対話不全やコンフリクトが生じたと言えるのか、またカフェやゼミの運営方法の改善をどのように評価するのか、という2つの問題である。

これまでは COE 分野横断研究プロジェクトの現場における対話不全を実体験に基づいてミーティングの場で話し合い、定性的に課題の整理を行った。しかし、対話不全、コンフリクトの状況をより精密に分析するためにはインタビューや観察調査、アンケート調査の実施等々、定量的な分析と評価の必要性が生じてくる。カフェの運営についても同様である。COE プロジェクトミーティングや学際コミュニケーションカフェ、ゼミ活動の実践と並行して、このようなデータを得ることができればコミュニケーション空間の設計や運営方法に関して新しい施策や提案を行うことができるかもしれない。より客観的な分析を行うためには、利害関係がない第三者の視点から調査研究を実施するのが望ましいと考えられた。

2005年9月28日には立命館大学人間科学研究所の荒川歩氏を本学に招聘し、研究会セミナー「異なる立場の人をつなぐツールの開発—学融的コミュニケーションの問題と解決に向けた試案—」を開催し、定量的な分析と評価について学外研究者と共同研究の可能性を模索したのである。

表 1 平成 17 年度の学際コミュニケーションカフェにおける主な活動

第 3 回 8 月 10 日

テーマ「Be Ambitious Conference—学生による学生のための領域横断的な研究会議—」

話題提供者：井波暢人（材料科学） 司会者：学際コミュニケーション研究会世話人

2000 年に JAIST 学生と京都大学大学院の学生で立ち上げた、学生による領域横断会議 BAC について、当時スタッフだった井波氏より解説。分野を超えた学生の学問的交流が研究にどんな影響を与えるか議論。破壊的批判（ネガティブな批判）を禁止にした。

第 4 回 8 月 31 日

テーマ「一般教養・・・知っておくべき共通の知識とは何か？」

話題提供者：葉山稔（知識科学） 司会者：葉山稔

一般教養とは何か、学生、教職員がそれぞれの視点と経験から語り合った。参加者でアコモデーションを形成できるプロモート手法について検討。

第 5 回 9 月 7 日

テーマ「最近、興味・関心のある異分野の学問分野は？」

話題提供者：浅野浩央（知識科学） 司会者：浅野浩央

知識、材料、情報各分野の学生がそれぞれ興味のある異分野について語り合い、文献や論文、情報について互いに紹介しあった。名札を導入。

第 7 回 9 月 21 日

テーマ 「私の研究の空間」

話題提供者：金凡性（科学技術開発戦略センター研究員） 司会者：浅野浩央

電車では本がスラスラ読める、図書館では研究が捗らないなど、それぞれが勉強、研究に適した環境について話し合う。勉強机の配置や本の整理法など参加者の勉強空間についても話し合った。一部の参加者が議論を独占しないよう、砂時計（3 分）を設置。さらに、技術 KI 手法の一部を導入して会のとりのまとめを行った。

3.サイエンスカフェ石川の誕生

以上の経過を辿った「学際コミュニケ

ーションカフェ」は、学問分野をまたぐテーマで、気軽な語り合い、話し合いを図る実践の場を構築した。こうした活動を基に、2005 年 10 月 2 日に「JAIST

SCIENCE CAFE 実行委員会」が発足し、東北大学等における先駆的なサイエンスカフェ活動の視察、カフェ運営のためのファシリテータの勉強会などを通し、サイエンスカフェへの理解を深めていった。同月 29 日～30 日に行われた設立されたばかりの石川県立大学第一回学園祭「響緑祭」にサイエンスカフェを出店し、北陸初となるサイエンスカフェの開催を実現したのである。

3.1. 金沢大学と本学の二つの COE が交流

この最初のサイエンスカフェにおいては第 1 日目に金沢大学 21 世紀 COE プログラム「環日本海域の環境計測と長期・短期変動予測」において黄砂の研究を推進していた佐藤努助教授が、黄砂の問題について幅広い視点を交え話題提供を行った。同じ石川の地において 21 世紀 COE プログラムを展開する 2 大学が初めて交流の場を形成したのである。COE 拠点同士の交流はこの 2005 年の段階では先駆的な意義があった。

2 日目は知識科学研究科・博士後期課程の千原かや乃氏（2006 年度から COE-DC 研究員）と同博士後期課程の宮下明珠氏が、環境に配慮した焦点や景観の美しい街並みなどを標記した国際標準の環境地図「グリーンマップ」について話題提供を行った。各テーブルにはファシリテータを含め来場されたさまざまな立場の参加者 5 名前後が着席。専門の研究者であるゲストスピーカーのトークの後にテーブルごとにディスカッションを行い、意見や疑問点を簡単にまとめて発

表した。両日合わせて 60 名程度の地域の市民の参加を得ることができた。

この最初の試みが核となり、本 COE プログラムを支えるポスドク研究員、RA、LA 等の若手研究者達を基盤として「サイエンスカフェ石川」が発足した。



図 2 石川県立大学第一回学園祭「響緑祭」におけるサイエンスカフェ

3.2. 「サイエンスカフェ石川」の特色と、その後の発展

本 COE プログラムにおける「サイエンスカフェ石川」の特色は、第一に上記のように COE プログラムを支える若手研究員らの自発性と創意によって支えられていたという点である。

話題提供者の選出やカフェ運営の主要な担い手である「ファシリテータ」の育成も、COE 事業推進者の一人である近藤修司教授の指導を受け、自律的に進められていた。こうしたボトムアップ型の活動こそが本 COE の最重要目標である「知のコーディネータ」育成の場として機能し、アクティビティの高い若手研究員を育てていったと言えるだろう。

4.地域との主要な交流場として活性化 —自治体からの助成の獲得

以上の取り組みは、平成 18 年度下期に本学が立地する能美市の注目を集めた。同年 12 月に日本で最初のサイエンスカフェ「Café Scientifique TOKYO」(2005 年 4 月 5 日第 1 回開催)⁷の開催に尽力した元東大助手の中村征樹氏を話題提供者にサイエンスカフェ形式で開催した COE 学際セミナーに参加した能美市企画情報課長の澤田信市氏から公的な助成の申し出を受けた。能美市民と本学との交流の場として期待できるという評価を得ることができたのである。翌 2007 年度より正式に能美市学官連携協定の課題として資金面での助成を受託することができたのである。本 COE の取り組みの中でも地域連携の面で顕著な成果を上げることができた。

4.1.地域社会と本学を繋ぐ場として

この学官連携協定に基づく第 1 号のサイエンスカフェ石川は、2007 年 8 月 7 日に地元能美市立和気小学校 5 年生児童の教室への出張サイエンスカフェという初の取り組みで実現した。話題提供は本学マテリアルサイエンス研究科博士前期課程院生 (COE 事業推進者の三宅幹夫教授の研究室所属) の宮崎幹基氏が行い、「液体窒素ってなんだろう? ~『-196℃の世界へ』~」と題する低温物理学の実験を実際に小学校の教室に導入して実現した。この試みは地元紙や CATV 局の小松テレ

⁷ <http://www.cafescientifique.jp/>

ビの報道にも取り上げられた。

また特筆すべきは 2007 年度から能美市学官連携協定モバイルリテラシー研修の手法としてサイエンスカフェ形式が採用され、7 月、9 月、12 月に広く能美市公立小中学校の家庭教育委員や中学生への社会教育の場としても採用されるに至った。同年 10 月には、能美市と同様の実践をサイエンスカフェ形式によって野々市町教育委員会からの要請にも応えた。

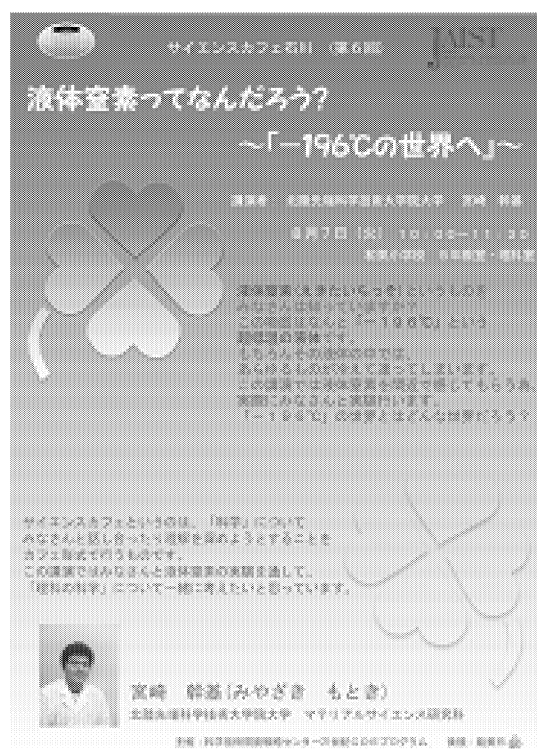


図 3 能美市立和気小学校における出張サイエンスカフェのポスター

4.2.コミュニケーションツール開発における創意工夫の模索

専門家と市民とのコミュニケーションを深化させるための工夫も鋭意推進された。サイエンスカフェ石川の主要な担い手である知識科学研究科・博士後期課程の宮下明珠氏は、参加者の話題の内容への理解の度

合いを定量的に可視化するためのツールとして「へえへえボタン」を開発しカフェ実践の場に投入した。「へえへえボタン」は地元報道機関からも記事として取り上げられた他、前記のサイエンスアゴラにおいても全国のサイエンスカフェの担い手から注目を集めることができた。サイエンスアゴラにおける本学の展示は NHK 教育テレビの科学番組「サイエンスゼロ」においても紹介された。



図 6 能美市立和気小学校で用いられた「へえへえボタン」

5. 地域の生涯学習の場としてのサイエンスカフェ

能美市との学官連携協定に基づく最新の取り組みは、サイエンスカフェ石川としては第 8 回目の開催となった、有機 EL をテーマとした「やさしいホテルの光と、癒しの茶室空間」として結実した。2008 年 2 月 23 日に能美市教育委員会との共催により、本学知識科学研究科博士前期課程の小林 豊氏が話題提供者となった。会場は能美市の公共施設である根上総合文化会館の研修室において開催された。

内容は、今日、ストレス社会と呼ばれるほどにまでなった日本の張りつめた社会や生活にゆとりと心の癒しを理解促進のため本学知識科学研究科の永井研究室で研究対象とされている有機 EL によるホテルの光に似せた茶室の空間がどのようなもので、もし街中や身近にあったらどうであるかなどを話題に、約 10 人の市民の議論と理解を深めていただいたのである。

カフェ当日の議論と参加者からのアンケートでは「有機 EL」という先端技術が、市民の日常生活にどのように反映されていくかを「癒し」をキーワードとして理



図 4 北國新聞に掲載された「へえへえボタン」の紹介記事（2007年5月19日）

また 2007 年 2 月には JST において科学技術理解増進事業を担う長神風二氏の本学への視察を受けることもできた。



図 5 能美市立和気小学校におけるサイエンスカフェ

解を促進できたことが推察された。



図7 能美市根上総合文化会館の
カフェ会場で議論に集中する市民

総じて本 COE における「サイエンスカフェ石川」⁸は本 COE が育成した知のコーディネータ育成と実践の場として、かつ地域社会との有機的な連携の場としての役割を果たすように成長したのである。

以上の取り組みから学際コミュニケーション活動の一環として始まったサイエンスカフェの活動が地域連携において有用であり、先端科学技術の知識を地域の市民に伝えていく上で有用であることから生涯学習の場としても有用であることを発見したと言えよう。

【参考文献】

吉田民人「俯瞰型研究プロジェクト」『学術の動向』Vol.4 No.1 1999年

吉田民人「新しい学術の体系」の必要性と可能性」『学術の動向』Vol.6 No.12 1999年

二村英介「安全・安心な社会の構築に資する科学技術政策の現状について」第2回社会技術研究シンポジウム講演会資料 2005年

⁸<http://www.jaist.ac.jp/coe//cafe/>

日本学術会議横幹連合「21世紀の学術における横断型基幹科学技術の役割」

報告書日本学術会議 2005年

日本学術会議『新しい学術の体系—社会のための学術と文理の融合—』2003年

日本学術協力財団編

『学会名鑑 2004-2006年版』日本学術協力財団 2004年

岩瀬信雄・立瀬剛志「大学における創造的研究支援のための方法論に関する研究」『知識創造論場』第1巻2号 2004年

藤垣裕子『専門知と公共性—科学技術社会論の構築へ向けて』東京大学出版会 2003年

高木里美「学際コミュニケーション活動

の本年度における実績と展望」

『知識創造場論集』第4巻第1号

pp.13-16 2007年

宮下明珠 平松章男 千原かや乃 山下邦弘 小林俊哉「双方向コミュニケーション

ツールとしてのへえへえボタンの有効性」『学会インタラクション 2007』2007年3月 東京

高木里実 浅野浩央 大仁田耕一「学際コミュニケーションの試みとネットワーク

分析による活動評価」研究・技術計画学会第21回年次学術大会(東北大学) 2006年

浅野浩央 緒方三郎「大学における学問分野をこえたコミュニケーションの諸課題—北陸先端科学技術大学院大学 21世紀

COE プログラムにおける学際コミュニケーション活動を通して」研究・技術計画学会第21回年次学術大会(政策研究大学院大学) 2005年

葉山稔 奥津祥子「学術研究における学際

コミュニケーションの円滑化－北陸先端
 科学技術大学院大学 21 世紀 COE プログ
 ラムにおける事例－」研究・技術計画学

会第 21 回年次学術大会（政策研究大学院
 大学）2005 年

表 2 サイエンスカフェ石川の軌跡（敬称略 2008 年 2 月現在）

年度	テーマ	話題提供者（敬称略）
2005 年度	第 1 回 2005 年 10 月 29 日／30 日 「石川地域の環境・人・今」	佐藤努(金沢大学助教授)、千原かや乃 (北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科) 他
	第 2 回 2006 年 3 月 23 日 「ケータイ安全・安心ミッション」	浅野浩央（北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科）株式会社 NTT ドコモ北陸 研修インストラクタ
2006 年度	第 3 回 2006 年 6 月 3 日「相対性理論は間違っているか？－疑似科学、思いこみの科学－」	松田卓也（神戸大学名誉教授 Japan Skeptics 会長 宇宙物理学者
	第 4 回 2006 年 10 月 28 日／29 日 「風土からみた地域再生」	平松章男／千原かや乃（北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科）
2007 年度	第 5 回 2007 年 5 月 26 日「カフェでサイエンス－JAIST 生の新しい取り組み－」	宮下明珠（北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科）
	第 6 回 2007 年 8 月 7 日「液体窒素ってなんだろう？～『－196℃の世界へ』～」	宮崎幹基（北陸先端科学技術大学院大学 マテリアルサイエンス研究科）
	第 7 回 2007 年 10 月 27 日／28 日 「アートのパワー」	蓑 豊（金沢 21 世紀美術館 特任館長）／永井由佳里（北陸先端科学技術大学院大学 准教授）
	第 8 回 2008 年 2 月 23 日 「有機 EL の魅力と癒し効果」	小林 豊（北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科）